

Nowhere but Sajima

正会員 吉村靖孝君

佐島マリーナからほど近い海岸沿いの道路から少し入ったところにこの建物は建っている。周囲にはマンションも立ち並び、貸別荘という用途には少々似つかわしくない敷地にも見える。けれども建物に入るととんでもない広大な海原が空間を圧倒している。内部と外部の境が一瞬分からなくなるようなそんな風景の飛び込み方である。そして先程までの近隣の建物や道路の喧騒は切断される。都心からほど近い場所でありながら最高のリゾートイメージを生み出したいというデベロッパー（クライアント）のコンセプトが見事に建築化されていることを納得する。その理由は繰り返しになるが自然の真ただ中ではない交通至便な場所でいながら異次元の世界を切り出しているところにある。

ではそのリゾートイメージはいかにして建築化されているのだろうか？ ただ大きな窓を海に向けて作ればできるというものでもない。

まずは配置の妙である。台形の敷地に三角形の平面を置いているのは構造的理由による。荷重をかけられない海沿いの地盤上を片持ちとするために陸地側への引っ込みを大きくした結果である。しかし、構造的理由に加え、この三角形平面の底辺にアプローチすることが道路側の喧騒から隔離された異次元のアプローチを生み出しているのもまた事実である。

次に、この点がこの建物で最も重要な点であろうと思われるが、各階に護岸と55°ほど振れた平行に建ち並ぶ壁群である。それらは1階に5枚、2階に3枚、3階に5枚、上下階で異なる位置に配置されている。そしてこれらはほとんどが大きくくりぬかれ、相互の空間は視覚的に連続し、見え隠れする空間が立ち現われている。

この壁には四つの意味があると思われる。ひとつはもちろんこの壁が主体構造として建築物を支えていること。二つ目は護岸と垂直ではなく角度をつけて沖の方を向いていることで、この壁が陸側のマンションなどの周辺建築を視界から取り除いていること。三つ目は上下階で異なる位置に置かれた壁が立面にそのまま現れることで上下に不連続でランダムなファサードを構成していること。そして最後は上述した通り、壁構造がぎりぎり成立する範囲で開けられた開口が異なる機能を分節しながら緩やかに連続させていることである。

平行配置された壁が四つの意味を持ちながら、この建物の特異なものにしていることは明白である。つまり構造壁が視界のリゾートイメージを担保し、ランダムで弛緩した楽しいファサードを生み、そして緩くつながるリラックスした内部空間を生み出しているということである。簡単なひとつの操作が建築的要求を一気に解決しながら多彩な表現を生み出しているところにこの建物の手品のような面白さが潜んでいる。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。